

野間三竹年譜稿

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学総合ビジネス学科

【キーワード】

漢文学 近世前期 野間三竹 石川丈山 林羅山 林鶯峰 林読耕齋

はじめに

野間三竹は、近世前期に活動した医者・漢学者である。三竹に注目する理由は、近世前期における漢学者・知識人の、文人的な側面をよく具現化した存在と考えるからである。

その活動の詳細については、以前に拙稿『古今逸士伝』考―その編集の動機と方針―（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第41輯・第3分冊 平成8年3月）、『近世初期における『遵生八牋』受容―丈山・三竹・読耕齋を中心として―』（『近世文芸 研究と評論』第54号 平成10年6月）、『本朝詩英』小考―『本朝一人一首』の利用―（『近世文芸 研究と評論』第63号 平成14年11月）、『近世前期における陳繼儒の影響―三竹・丈山・鶯峰・読耕齋を中心に―』（『近世文学研究の新展開』ペリかん社 平成16年2月）、『人見竹洞書簡の紹介と考察―十月十二日付、前田綱紀宛―』（『近世文芸 研究と評論』第66号 平成16年6月）において考察を加えたことがあった。特徴的なことは、第一に多くの書物を編纂・刊行したこと、つぎに林家の面々や丈山をはじめとする、当代の知識人たちと広く交際したことである。

そこで、三竹の生涯を概観すべく、現時点で知り得た没年までの年代の確実な事項を集め、以下に掲げる年譜稿を作成した。主として林家の詩文集に見える三竹の足跡を求めたものであるが、他にも参照すべき文献で未調査のものや、失考、見落とし、また記述の不統一・不均衡等も少なくないと思われる。今後の課題としたい。

なお、参照した多くの文献のうち、三竹の詩集である『柳谷集』に簡単に触れておきたい。現在知り得る本書の伝本は、刈谷市立刈谷図書館村上文庫に所蔵される写本が唯一のものである（本稿では国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによった）。この写本には、単純な誤写と考えられる箇所がままあり、本来ならば当然収載されるべき『柳谷集序』（『鶯峰林学士文集』巻八十四に載る）を欠く一冊本である。果たして『柳谷集』の全体を伝えるものか否か即断はできないが、二言・三言・四言・五言古詩・五言律・五言排律・六言・七言律・五言絶句・七言絶句・雑体・聯句で構成されており、三竹の人と作品を伝える重要な文献であるといえよう。

凡例

各項目の記述は、○印に続けて、月日、事項、典拠の順で示した。三竹周辺の人々の重要事項については●印を付して同様に記した。注記が必要と思われる場合は※印を付してその後に示した。また、それぞれの記述の典拠は（ ）で示し、以下の資料については略称を用いた。

諸家譜：『寛政重修諸家譜』巻八百三十五（続群書類従完成会

昭和40年7月）

墓誌：「柳谷墓誌」（井上敏幸「野間三竹と鍋島直條 附翻刻『柳谷

墓誌』—『楓園家塵』抜書（二）—『江戸時代文学誌』第三

号 柳門舎 昭和58年6月）

柳：『柳谷集』（刈谷市立刈谷図書館村上文庫蔵本）

詩文稿：『野間三竹詩文稿』（国会図書館蔵本）

新覆：『新編覆醬集』（小川武彦・石島勇『石川丈山年譜』附編 青

裳堂書店 平成8年1月）

新覆続：『新編覆醬続集』（小川武彦・石島勇『石川丈山年譜』附編

青裳堂書店 平成8年1月）

羅詩：『林羅山詩集』（京都史蹟会 ぺりかん社 昭和54年9月）

羅文：『林羅山文集』（京都史蹟会 ぺりかん社 昭和54年9月）

鶯詩：『鶯峰林学士文集』（近世儒家文集集成12 ぺりかん社 平成

9年10月）

鶯詩：『鶯峰林学士詩集』（筑波大学附属図書館蔵本）

日録：『国史館日録』（史料纂集『国史館日録 第一（五）南塾乗』

続群書類従完成会 平成17年6月、『本朝通鑑』第十六、十七

国書刊行会 大正8年11・12月）

読文：『読耕林先生文集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

読詩：『読耕林先生詩集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

自梅：『自撰梅洞詩集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

梅文：『梅洞林先生文集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

梅詩続：『梅洞詩続集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

鳳全：『鳳岡林先生全集』（国立公文書館内閣文庫蔵本）

竹詩文：『竹洞先生詩文集』（『人見竹洞詩文集』汲古書院 平成3

年5月）

錦：『錦囊集』（筑波大学附属図書館蔵本）

東：『東海集』（筑波大学附属図書館蔵本）

なお、以上の資料の他、本年譜稿作成にあたっては、主に以下の文献を参照させていただいた。

『西讃府志』（藤田書店 昭和4年11月）

『新訂増補 国史大系 徳川実紀』第三篇～第五篇（吉川弘文館 昭

和51年5月・5月・6月）

長澤規矩也監修・長澤孝三編『漢文学者総覧』（汲古書院 昭和54年

12月）

跡部佳子「徳川義直家臣団形成についての考察（七）—義直の文治

臣僚—」（『金鯢叢書』第9輯 昭和57年6月）

『香川県史 第三卷 通史編 近世Ⅰ』（四国新聞社 平成元年2月）

小川武彦・石島勇『石川丈山年譜 本編』（青裳堂書店 平成6年9月）

赤松俊秀編纂『隔莫記』（思文閣出版 平成9年3月）

鈴木健一『林羅山年譜稿』（ぺりかん社 平成11年7月）

徳田武『尺五堂先生全集』解題・解説』（『尺五堂先生全集』ぺりか

ん社 平成12年10月）

野間三竹年譜稿

元和元年（1695） 一歳

○五月八日、生まれる。父は玄琢（名成岑、号白雲・寿昌院）、母

は神崎氏（墓誌）〔諸家譜〕。※慶長十三年生まれとする文献も

ある（国会本『野間三竹詩文稿』後表紙見返し）の書き込み・『漢文

学者総覧』・『石川丈山年譜』・『国書人名辞典』など。

元和二年（1697） 三歳頃

○唐詩数首を暗唱する〔墓誌〕。

元和六年（1699） 六歳

○初めて『大学』を読む〔墓誌〕。

●父玄琢、寿昌院の号を許される〔諸家譜〕。

元和九年(1623) 九歳

●閏八月十二日、玄琢、法印に叙される〔諸家譜〕。

寛永元年(1624) 十歳

○四書五経に通じ、詩賦を作る〔墓誌〕。

寛永二年(1625) 十一歳

○内大臣中院通村に拝謁し、詩を呈上。通村、その詩に和歌で次韻する〔墓誌〕。

寛永三年(1626) 十二歳

○正月一日、「元旦 十二歳之作」を詠む〔柳・七絶〕。

●七月一日、玄琢、二条城で初めて秀忠に拝謁し、これより隔年に江戸に伺候するようになる〔諸家譜〕。

寛永四年(1627) 十三歳

○正月一日、京にあつて「元旦」を詠む〔柳・七律〕。

○正月、林羅山から「和三竹試筆韻」を贈られる〔羅詩・一六〕。※〔墓誌〕には、この年、三竹が羅山に謁したと記すが、実際は京都から送られた三竹の歳旦詩を、江戸にいた玄琢が羅山に披露して和韻を請うたことが、「和三竹試筆韻」の前書によって判る。

○この頃、菅原玄同の『史記』・『莊子』・『紀政綱目』の講筵をしばしば聴講した〔墓誌〕。

●弟成之(字安節、号韜窩)生まれる。「母は成太におなじ。正保三年はじめて大猷院殿(家光)に拝謁し、のち戸田采女正氏定が所領美濃国大垣にあり、元禄三年十月四日めされて三彌某が名跡となされ、廩米二百俵を賜りて寄合に列す。八年十二月六日致仕し、宝永元年正月二十日死す。年七十八。赤坂の松泉寺に葬る。のち代々葬地とす」〔諸家譜〕。

寛永五年(1628) 十四歳

●四月、玄琢、家光の痘の治療にあたる〔諸家譜〕。

○夏、羅山から「次三竹年少夏日之作」を贈られる〔羅詩・四四〕。

○この頃、『大学』の講義を行う。稲辺春碩ら、大いに称賛する〔墓誌〕。

寛永六年(1629) 十五歳

○春、羅山から題を与えられ、「探梅」を詠む〔柳・七絶〕。※この頃、羅山は三竹に詩賦の題を示して、しばしば試した〔墓誌〕。

○十月一日、「学医通論叙」を作る〔学医通論刊本〕。

○この年、羅山に書格の銘を請い〔墓誌〕、「書格説」を贈られる〔羅文・二八〕。

○この頃、『医経』の講義を行う。織田常信(信雄)も聴講に訪れた〔墓誌〕。また、西山の隠士、吉田玄之(素庵)をしばしば訪問し〔墓誌〕、李杜韓柳の諸集および三史、『文選』を編閲した〔墓誌〕。

寛永七年(1630) 十六歳

○この年、京都滞在中の羅山から、『春秋胡伝』・『道德経』等の講説を受ける〔墓誌〕。

○この年、『医統源流』を著す〔墓誌〕。

寛永九年(1632) 十八歳

○三月、父に従い江戸へ下る〔墓誌〕。松永尺五から「送野間氏三竹并序」を贈られる〔尺五全集四〕。江戸では、初めて家光に拝謁。酒井忠世を通じて、学問に励むよう告げられる〔墓誌〕。

○七月、官暇の命あり、京へ帰る。帰京後は呆亭で、読書に励む〔墓誌〕。

寛永十一年 (1634) 二十歳

○正月、江戸滞在中の玄琢に歳旦詩を送り、羅山の和韻を求める〔羅詩・一六〕。

○八月二十五日、那波活所と京都滞在中の羅山を自宅へ招く〔柳〕〔羅詩・五四〕〔活所遺藁〕四〕。

○この頃、羅山に字説を求める〔墓誌〕。また、井伊直孝、板倉重宗、木下長嘯子、石川丈山、堀杏庵、那波活所らと親しく交遊する〔墓誌〕。

寛永十二年 (1635) 二十一歳

○この年、本多出羽守正勝の女を娶る〔墓誌〕〔諸家譜〕。

○この年、羅山、三竹の求めに応じて「子苞説并詩」を作る〔羅文・二九〕。

○この頃、『素問』の講義を行う。近衛応山公(信尋)・黒川寿閑なども聴講した〔墓誌〕。

寛永十三年 (1636) 二十二歳

○五月十二日、法橋に叙される〔諸家譜〕。

○十一月十七日、来朝した朝鮮通信使の学士権弼、医師由判事士立信甫と筆談、律詩を唱和する〔墓誌〕〔詩文稿〕。

●この年、玄琢、東福門院の治療にあたり、銀の香合、蒔絵の香合、伽羅、黄金などを賜る〔諸家譜〕。

寛永十四年 (1637) 二十三歳

○正月、弟韜窩(成之)の歳旦詩の和韻を尺五に求め、尺五から「和野間氏成之少年韻并序」を贈られる〔尺五全集〕四〕。

○正月、江戸滞在中の玄琢へ弟韜窩の歳旦詩を送り、林鶯峰の和韻を求める〔鶯詩・一〕。

○秋、石川丈山・松永昌三と共に西山に登り、寛永九年に没した吉田素庵の別墅である期遠亭に遊ぶ。丈山に「登西山」〔新覆・

一〕あり。

○十二月、丈山から書簡「答埜静軒」〔新覆統・一一〕を寄せられる。※文中、鳥原の乱について触れる〔板倉尚食監前月晦日至於肥州云云〕ことからこの歳末の書簡と推定。

○この頃、石川丈山・藤原為景・松永昌三としばしば雅会を結ぶ。また、『陶淵明集』、『鶴林玉露』の「山静日長」の條を好み、「子漁樵問答」・「著山人問答」を著す〔墓誌〕。

●この年、玄琢、江戸に伺候〔諸家譜〕。

寛永十五年 (1638) 二十四歳

○正月一日、「元旦」を詠む〔柳・五律〕。

○正月、江戸滞在中の玄琢へ「元旦」を送り、鶯峰の和韻を求める〔鶯詩・一〕。

○正月、江戸滞在中の玄琢へ弟韜窩の歳旦詩を送り、鶯峰の和韻を求める〔鶯詩・二〕。

○六月二十五日、藤原為景に招かれ、丈山・尺五と共に市原の山荘に遊び、韜窩の「市原八景和歌」に倣ってそれぞれ八景詩を作る〔新覆・二〕〔尺五全集〕四〕〔柳・五絶〕。

○七月十六日夜、為景・丈山・尺五と共に、鷹峯の白雲亭から諸山の列燈を見る〔柳・七絶〕〔尺五全集〕三〕。

○十二月十九日、法眼に昇る〔諸家譜〕〔大猷院殿御実紀〕三九〕。

●この年、玄琢、東福門院に附属することとなり、御慶米五百俵を賜る〔諸家譜〕〔大猷院殿御実紀〕三九〕。

寛永十六年 (1639) 二十五歳

○正月一日、「元旦」を詠む〔柳・五絶〕。

○七月二十三日、これより先、丈山・尺五と共に、為景に協力して「惺窩先生文集」の「評論校讎」に関与し、この頃迄に終了したか〔石川丈山年譜〕所引「藤原為景朝臣遺文」。

○この年、江戸へ出仕する〔墓誌〕。

寛永十七年 (1640) 二十六歳

○正月一日、江戸にあり、「元旦」〔柳・五絶〕を詠む。

○正月、丈山から「和静軒在東武所贈」〔新覆・二〕を贈られる。

○四月二十五日、江戸城黒木書院において、医員として岡本玄琳介球と交替で宿直するよう、家光より命じられる〔天猷院殿御実紀〕四三〕。

○冬、丈山から書簡「簡埜静軒」〔新覆続・一三〕を寄せられる。

※文中、堀杏庵が九月に京から尾張へ帰ったことに触れる〔杏庵九月下旬帰尾府〕ことから、この冬の書簡と推定。

○この年、羅山に「莊周夢蝶図」〔羅詩・七二〕を求める。

○この年、奥医として東福門院に附属し隔年で江戸に出仕し〔諸家譜〕、幕命により大久保忠職の母・富永主膳・松平忠昌・松平忠明・土井利勝・林羅山などを治療する〔墓誌〕。

○この年以前、讃岐高松の生駒家から、米三十石の合力を受けていた〔西讃府志〕附載「生駒家分限帳」。

寛永十八年 (1641) 二十七歳

○病に罹る。故に、官暇の旨を承け白簾を賜る〔墓誌〕。

○京に帰る。以後、白雲峰下に退居すること三年に及ぶ〔墓誌〕。

なお、病余にも読書を止めず、詩酒をもって興を遣り、田淵三廸・田玄淳・佐三及らの門生を集め、経史を討論する。その学風は、仏老を排斥し、象山陽明の異流を喜ばず、濂洛の学を信奉するものであった。また、この頃、父の著『群方類藁』を補

い六十巻とし、『修養編』・『学医通論』・『医苑叢説』・『沈静録』・『白雲僻居集』・『逸士伝』を著し、杜集を読んで『絶句集解』を作った〔墓誌〕。

○九月一日、陳元賛、三竹の求めに応じて「沈静録叙」を作る〔沈

静録〕古活字版〕。

寛永十九年 (1642) 二十八歳

○五月八日、夢に芍薬の詩句を得る〔柳〕。

○六月、「七医解」を作る〔詩文稿〕。

○八月、「白雲溪鐘銘并叙」を作る〔詩文稿〕。

○十月一日、「学医通論叙」を作る。〔学医通論〕刊本

○十月三日、丈山・韜窩と共に高雄山に遊ぶ〔柳・七律〕〔新覆・二〕。

○十一月、家童定賢と詩の贈答あり〔柳・五絶〕。

寛永二十年 (1643) 二十九歳

○この年、江戸城に勤仕する〔墓誌〕。

○正月四日、曲直瀬道三の五十回忌にあたり、霊前に五律一首を捧げる〔柳・五律〕。

○この年、朝鮮聘使来朝。朴螺山（真卿）と交遊する〔墓誌〕。

○六月十六日、螺山、三竹の求めに応じて「沈静録叙」を作る。〔沈静録〕刊本

○夏、丈山を通じて、羅山に「杜詩絶句跋」〔羅文・五三〕を求める。

○八月五日、「高子四時幽賞跋」を作る〔四時幽賞〕刊本〕。

○八月十五日、石川丈山を訪問する〔新覆・二〕。

○九月十三日、鳳林承章を訪ね、延齡丹を贈り、金閣・茶屋を見物する〔隔菴記〕同日条〕。

○秋、木下長嘯子を訪ね、五絶一首を詠む〔柳・五絶〕。

正保元年 (1644) 三十歳。

○八月十五日、「嘉友」の招きに応じて遊び、詩を詠む〔柳・七絶〕。

正保二年 (1645) 三十一歳

○正月、丈山から書簡「答埜静軒」を寄せられる〔新覆続・一四〕。

○六月十三日、野間玄琢の母、没す。〔京都名家墳墓録〕第三編北

部。丈山に「贈玄琢野氏居喪并叙」〔新覆・三〕あり。

○十一月十四日、玄琢、京都にて没す。享年五十六歳〔諸家譜〕。

三竹、京に帰り、父を白雲溪に葬る〔墓誌〕。

正保三年 (1646) 三十二歳

○この頃、丈山より「弔尉静軒自東武帰居何怙之大憂」〔新覆・三〕を贈られる。

○江戸へ赴く〔墓誌〕。

○二月二十八日、家督を相続する〔諸家譜〕。

○四月十日、父の遺物である唐大海の茶入を献じ、敝有院殿〔家綱〕

に鹿の筆架をたてまつる〔諸家譜〕〔大猷院殿御実紀』六三〕。

○四月十三日、野間宗印（三竹・韜窩の祖父）没す。享年未詳〔諸

家譜〕〔京都名家墳墓録』第三編北部〕。

○六月二十五日、上洛の官暇を得る〔大猷院殿御実紀』六四〕。

●六月二十五日、韜窩、初めて家光に拝謁する〔大猷院殿御実紀』

六三〕。

○八月十五日、三竹の鷹峰の葉師堂で、丈山らと共に観月する〔新

覆・三〕。

●九月八日、韜窩が鷹峰の別墅で茗宴を催す〔新覆・三〕。

○十一月十四日、父玄琢の一周忌にあたり、「祭文」を捧げる〔詩

文稿〕。

○冬、丈山が呆亭を訪れ、「呆亭即興」を詠む〔新覆・三〕。

○この頃、武田道安と交代で、京と江戸との間を来往する。後光

明帝・法皇・新院・上皇を診治する。とくに、東福門院の御脈

を診る〔墓誌〕。

正保四年 (1647) 三十三歳

○八月二十一日、等持院詰首座とともに小出伊勢守吉親を案内し
て鳳林承章を訪ね、金閣を見物する。続けて、三竹の下屋敷で

小出伊勢守による振舞を催す〔「隔蓑記」同日条〕。

○八月二十四日、鳳林承章は三竹を訪ねたが、三竹は外出してお

り面会できなかった〔「隔蓑記」同日条〕

○日光門跡守澄法親王に従い、京を離れ江戸へ向かう〔墓誌〕。

○十月一日、家光に拝謁する〔大猷院殿御実紀』六八〕。

○十月十五日、眼医笠原養泉重次と共に、守澄法親王の眼疾治療

を命じられる〔大猷院殿御実紀』六八〕。

●十一月十四日、韜窩、父玄琢の三回忌にあたり、「祭文」を作る〔詩

文稿〕。

慶安元年 (1648) 三十四歳

○閏正月二十五日、日光山の供奉を命じられる。〔大猷院殿御実紀』

六九〕。

○日光山廟大祭。家光に従って登山する〔墓誌〕。

慶安二年 (1649) 三十五歳

○この年、家光、初めて徴疾あり、御脈を診る〔墓誌〕。

○七月十一日、後陽成院卅三回御法会のため守澄法親王に従い、

上洛を命じられる〔大猷院殿御実紀』七五〕。白鐙および衣を賜

う〔墓誌〕。

○八月十五日、丈山を招き、白毫山で観月する〔新覆・四〕。

○九月二十六日、京から江戸に戻り、家光に拝謁する〔大猷院

殿御実紀』七六〕。

慶安三年 (1650) 三十六歳

○正月二十四日、増上寺方丈還無の大病を、内田玄勝千里、土岐

永元敦山、外科川島周庵茂繼、関本伯典重長、津軽左馬助建次

らと共に治療するよう命じられる〔大猷院殿御実紀』七七〕。

○五月、丈山から羅山の書簡を披瀝される。※与林羅山〔新覆統・
十二〕に「数日之前偶与永日牧三竹寿閑等潭此題之難読相感足

下之博識以為天下之奇才」との記述が見えることから推定。

○十月十六日、丈山の植えた南燭を見て、五律一首を詠む〔柳・五律〕。

●八月十五日、丈山が韜衛の新宅を訪れ、観月する〔新覆・四〕。

慶安四年 (1651) 三十七歳

●四月二十日、徳川家光薨去。享年四十八歳。

○四月、丈山の求めに応じ「覆醬集叙」を作る。〔「覆醬集叙」刊本〕

○丈山と詩を贈答する。丈山に「偶為」〔新覆・四〕、三竹に「嗣韻梅関仙翁偶為之真作」〔柳・七絶〕、丈山に「静軒所和再継前韻」

〔新覆・四〕あり。

承応二年 (1653) 三十九歳

○春、「癸巳春雪」を詠む〔柳・七絶〕。

承応三年 (1654) 四十歳

○「戸田叟」とともに有馬温泉へ行き、「功牟地山湯泉五言十韻

并叙」を詠む〔柳・五言排律〕。

明暦二年 (1656) 四十二歳

○正月一日、「丙申試韻」二首を詠む〔柳・七絶〕。

○正月十日、「雪水烹茶詩并叙」を詠む〔柳・七絶〕。

○十月十六日、火災により江戸の屋敷を焼く〔「隔婁記」同月二十三日条〕。

○来朝した朝鮮通信使の李明彬（石湖）と筆談する。先考玉岑の

墓誌を石湖に求める〔墓誌〕。

明暦三年 (1657) 四十三歳

○正月一日、「丁酉詩韻」を詠む〔柳・七絶〕。

○正月十八・十九日、明暦の大火。江戸の寓居も類焼する。三竹は在京中であった〔墓誌〕。

●正月二十三日、羅山没。享年七十五歳。

○二月十四日、三竹の招きにより、蓮台野の下屋敷へ鳳林承章が訪ねてくる〔「隔婁記」同日条〕。

○三月、丈山を訪問し、七絶一首を詠む〔柳・七絶〕。

○四月、將軍徳川家綱、伏見親王の妹と婚禮。三竹、これに従い

江戸へ下る〔墓誌〕。途中、「東山道」を詠む〔柳・五古〕。

○江戸下向の折、如意に関する丈山の質問を読耕斎に取り次ぐ。

※読耕斎「答石丈山問」に「野間氏伝告于余曰如意之為器也乃是

は仏徒之所資乎抑儒家之所用乎」とある〔読文・一一〕。

○この頃、赤坂の寓居を新築し、望海亭と名付ける〔墓誌〕。

○八月十四日、「席上談題辭」を書く。〔席上談〕刊本〕

○八月、「臨江庵八景」を詠み、桂山上人に贈る〔柳・四言〕。

○この年以前、女子、生まれる。〔戸田采女正氏信が二男。三郎

左衛門信言が妻〕〔諸家譜〕。

○この年、嗣子成良、生まれる。字は允迪、通称は玄琢。「母は

正勝が女。寛文十年九月二十八日はじめて嚴有院殿（家綱）に

拜謁す。（時に十四歳）後父が遺跡を継ぎ、寄合となりて京師に

住し、隔年に江戸に候す。其例父がときのごとし。元禄二年

十二月十二日死す。年三十三。赤坂の松泉寺に葬る〕〔諸家譜〕。

万治元年 (1658) 四十四歳

○正月一日、「戊戌開筆」を詠む〔柳・七絶〕。

○四月二十七日、二十九日、加藤勿斎と書簡の往復あり〔錦・上〕。

○四月二十八日、駿府町奉行神保重利の治療が、久志本左京常倫

に命じられたが、後に常倫の病により、代わりに三竹が治療を

命じられることとなる〔「嚴有院殿御実紀」一五〕。

○八月十一日、読耕斎、梅洞と勿斎の別業に遊ぶ。その様子は「辰

子遊」〔読文・一六〕に詳しい。

○八月十六日、読耕斎より書簡「復静軒子」〔読文・四〕を寄せら

れる。

○八月、読耕齋と詩文を頻繁に贈答する〔柳〕〔東・三〕〔読詩・一七〕〔読文・一〕。

○十月二十一日、鷺峰、三竹の求めに応じて「竹窓漫筆序」〔鷺文・八二〕・「席上談序」〔席上談〕刊本〔鷺文・八二〕を作る。

○十月、読耕齋、三竹の求めに応じて「望海録序」を作る〔望海録刊本〕・〔読文・一三〕。

○この頃、読耕齋、三竹の求めに応じて「備忘編序」を作る〔読文・一三〕。

○冬、帰京にあたり、鷺峰・読耕齋・梅洞から詩を贈られる〔鷺詩・三九〕〔読文・一三〕〔梅統詩・五〕。

○十月二十九日、帰京にあたり、鷺峰から再び詩を贈られる〔鷺詩・三九〕。

○十月下旬、帰京にあたり、鷺峰から書簡と『星鳳楼帖』を、読耕齋から詩文を、また鷺峰・読耕齋両名から「詩仙堂六物前後三謡」を、それぞれ丈山へ託される〔鷺文・二八〕。

○十一月四日、帰京にあたり、勿齋から「送静軒三竹雅丈帰洛陽」〔錦・上〕を贈られる。

○十一月二十一日、京都に到着。即日、書簡と『星鳳楼帖』、「詩仙堂六物演後三謡」を丈山に届ける〔鷺文・二八〕。

○十一月二十三日、丈山を訪ねる。丈山の許で、竹洞と偶然に行き会う〔鷺文・二八〕。

万治二年(1659) 四十五歳

○六月一日、陳元賛、三竹の求めに応じて「席上譚叙」を作る〔席上談〕刊本〕。

○夏、読耕齋より「寄報静軒子」〔読文・五〕・「重複静軒子」〔六月上旬〕〔読文・五〕を寄せられる。

○八月十四日、江戸へ赴くにあたり、丈山より「送太医子苞寿昌院之之江都」〔東・三三〕〔新覆統・二二〕を贈られる。

○秋、鷺峰より「答望海亭主」〔鷺詩・四二〕を贈られる。

○秋、読耕齋より「寄静軒」〔読詩・一八〕・「寄静軒子并序」〔読詩・一八〕を贈られる。

○十月三日、鷺峰が尋ねてくるが、三竹不在のため会えずに帰る〔鷺詩・四二〕。

万治三年(1660) 四十六歳

○二月十七日、読耕齋から古詩「寄静軒野子」を贈られる〔読詩・一九〕。

○二月二十日、鷺峰から書簡「寄野静軒」を寄せられる〔鷺文・三〇〕。※二月十七日に三竹が鷺峰を訪問していたことが判る。

○二月下旬、鷺峰から書簡「寄野静軒」を寄せられる〔鷺文・三〇〕。※「香溪集」を鷺峰に返却し、鷺峰に『革節卮言』を貸したことが判る。

○二月、「余と読耕子友善。比年之間東西二京之中非詩則尺素往來或短或長大卒不一。余之來江東而后去。臘寄律詩不拘對偶。是盖古詩之流也。今亦唱古体而以存諸。静軒野子病懶擲文墨久矣。病与余親詩与余疎。前回借許渾廬綸崔顥趙抃集。况又晞髮集之新。我眼清我心乎謝在杭詩話也。奇聞亦可喜焉。彼是感荷不能止叨依元韻以答。為觀者必笑言依様画胡蘆」を詠む〔柳・五古〕。

○三月十一日、鷺峰、読耕齋、勿齋、竹洞、梅洞、鳳岡を望海亭に招く。詩文の贈答あり〔柳・三言〕〔鷺詩・四四〕〔鷺文・一一〕〔読詩・一九〕〔東海集・三〕〔梅詩統・九〕〔鳳全・一七〕。

○三月二十八日、読耕齋を訪ねるが、留守で会えず〔東・三〕。

○三月、「野子在望海亭而呆坐尤。無來客爐香醒懶睡。吟余唯見一池之水泛白鷗一庭之樹垂朱実。於是口占一篇戲為五色詩以色

為題詠」〔柳・七絶〕を詠み、鶯峰、読耕齋と詩を贈答する〔鶯詩四四〕〔読詩・一九〕。

○四月上旬、読耕齋を訪ねるが、留守で会えず〔東・三三〕。

○五月十七日、鶯峰、読耕齋、梅洞、竹洞とともに勿齋を訪問する〔鶯詩・四四〕。

○八月十日、読耕齋と竹洞と共に勿齋を訪問する〔東・三三〕〔鶯詩・四五〕。

○秋、「秋日訪勿齋幽居」を詠む〔柳・七絶〕。勿齋から和韻を贈られる〔錦・上〕。

○十月三日、鶯峰から鶯峰から『草木子』を返却される〔鶯文・三〇〕。

○十月上旬、鶯峰から書簡「寄野静軒」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。

○十一月十四日、読耕齋と勿齋亭に遊び「遊勿齋咏寒月」を詠む〔柳・七絶〕〔読詩・二〇〕。

○十一月頃、娘を亡くす。

○十一月二十五日、鶯峰から書簡「簡野静軒」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。娘を亡くした三竹への悔やみが述べられる。

○十一月下旬、鶯峰から「吊野静軒有娘子之喪」〔鶯詩・四五〕を贈られる。

○十一月頃、梅洞から「野静軒有娘子。先是嫁濃州某人。頃間即窅想其終天之訣。不堪哀慕之情。於是縛謳一篇聊弔慰之」〔梅詩統・一一〕を贈られる。

○十一月、読耕齋、三竹の求めに応じて「古今逸士伝序」を作る〔古今逸士伝』刊本〕〔読文・一三三〕。

○十二月十六日、鶯峰から『元遺山集』を返却される〔鶯文・三〇〕。

二〇〕。
○冬、鶯峰、三竹の求めに応じて「呼燈録序」を作る〔鶯文・八二〕。

寛文元年（1661）四十七歳

○正月一日、「春初口号」を詠む〔柳・七絶〕。

○正月、読耕齋・竹洞と歳旦詩の和韻を贈答する〔読詩・二〇〕〔柳〕。

○二月七日、読耕齋を訪ねるが留守で会えず〔読詩・二〇〕。

○二月二十六日頃、読耕齋と共に竹洞を訪ねる〔鶯文・三二〕。

●三月十二日、読耕齋没。享年三十八歳。

○四月、竹洞、三竹の求めに応じて「古今逸士伝序」を作る〔古今逸士伝』刊本〕。

○四月、帰京にあたり、人見卜幽齋から、五言古篇「驢野閑閑子」〔林塘集』下〕を贈られる。

○六月十七日、鳳林承章を訪ねる。〔隔莫記』同日条〕

○閏八月十五日、「閏八月十五日夜見月」〔柳・七絶〕を詠む。

○秋、石川丈山へ書簡及び長子成良の詩稿を寄せ、丈山から五律「寄貽野静軒并序」〔新覆統・四〕を贈られたか。

○冬、鶯峰から「寄野静軒并序」〔鶯詩・五〇〕を贈られる。

○冬頃、梅洞から排律「寄静軒并序」〔梅詩統・一三〕を贈られる。

○この年、松平忠房の丹波福知山城を訪れる。※鶯峰の「福地山城偃戈園景境詩二十首并引」〔鶯詩・五五〕に「去歳君在城之際静軒野三竹自洛往訪之相共流憩園中」とあることから判る。

寛文二年（1662）四十八歳

○二月二十一日、詩仙堂を訪れ七絶一首を詠む〔柳・七絶〕。

○四月、石川丈山の求めに応じて「覆醬集序」を作る〔覆醬集』刊本〕。

○四月、京を出発し、五月に江戸へ到着する。※三竹の「遊芝水

亭記」〔東・五〕に「寛文二年夏四月出京師五月至東都」とあることから判る。

○五月、鶯峰に小盆十個を贈る。※鶯峰に「野静軒丈人自洛来府惠貺小盆十箇每品有山水図可以怡目可以慰心作小律一首謝之」〔鶯詩・五四〕あり。

○六月十日、鶯峰を訪問するが会えず、晋軒宅を訪れ「柳月碑誌」を見る〔鶯文・三〇〕。

○八月、鶯峰から書簡「答子苞」を寄せられ、二、三日のうちに勿斎が参勤交代で江戸を離れること、翌々日竹洞の別墅で賦の会があることを伝えられる〔鶯文・三〇〕。

○八月、勿斎の参勤交代を見送り、「送勿斎藤子默君之之西州叙」〔東・五〕を作る。

○九月、鶯峰を訪問するが会えず。留守宅で「読耕年譜」を見る。

○九月末頃、鶯峰、梅洞、竹洞を招き、鶯峰から「望海亭八景八境詩序」〔鶯詩・五七〕、梅洞から「題望海亭八景八境詩後」〔梅文・五〕を贈られる。

○十月、鶯峰、三竹の求めに応じて「被潜楼主人勸而廣吉川正勝水楼観月韻」を詠む〔鶯詩・五七〕。

○十月、梅洞、三竹の求めに応じて「北溪含毫序」を作る〔「北溪含毫」刊本〕〔梅文・五〕。

○十月、鶯峰、三竹の求めに応じて「ノハ瓢説」を作る〔鶯文・一九〕。

○十月中旬、鶯峰、三竹の求めに応じて「修養編序」を作る〔「修養編」刊本〕〔鶯文・八三〕。

○十一月二十七日、鶯峰を招く〔鶯詩・五七〕。

○十二月、鶯峰から書簡「簡静軒野子」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。同月三日に『本朝通鑑』編纂の台命を受けたことを告げる。

寛文三年(1663) 四十九歳

○正月二日、「癸卯狗日雪」を詠む〔柳・五言古詩〕。

○正月、嗣子成良の歳旦詩を鶯峰・梅洞に披露し和韻を贈られる〔鶯詩・五八〕〔梅詩続・一七〕。

○正月中旬、鶯峰から「簡野子苞」を寄せられる。一昨日、三竹と話していたが、他に行く用事があり、話が途中になってしまったことを詫び、かつ成良の歳旦詩を褒める〔鶯文・三〇〕。

○正月、竹洞、三竹の求めに応じて「群書考序」を作る〔「群書考」刊本〕。

○正月十五日、日光山供奉を命じられる〔「嚴有院殿御実紀」二五〕。

○二月二日、鶯峰から「簡静軒」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。鳳岡の瘡瘡を診察してくれたことへの礼を述べる。

○二月四日、鶯峰から「答静軒」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。

○二月二十六日、日光山供奉の褒賞として、金五枚を賜る〔「嚴有院殿御実紀」二五〕。

○七月、鶯峰から「寄柳谷丈人并詩」を寄せられる。京にいる「一妹」が多病だが、薬を処方してもらい元気になった旨、礼を述べる〔鶯文・三〇〕。

○七月頃、京にあり。※七月下旬の鶯峰書簡「答石丈山」〔鶯文・二八〕の記述による〔「石川丈山年譜」〕。

○八月二十二日、鳳林承章を訪ねるが、留守で会えず〔「隔莫記」同日条〕。

○秋、鶯峰、四言「北山詩憶洛之友人柳谷叟而作」を詠む〔鶯詩・六一〕。三竹に「読向陽林子北山之什字和答焉」の和韻あり〔柳・四言〕。

○八月下旬、「答柳谷叟」〔鶯文・三〇〕を鶯峰から寄せられる。「北山之和」を示された感想を記す。

寛文四年 (1664) 五十歳

○閏五月、「俗語録」序を作る。〔俗語録〕刊本

○六月、「松亭記」を作る。※「松亭」大野郡灘郷松本村ニアリ

寛文中建之高山照蓮寺第三世龍興院純純〔金森出雲守重頼子

閑居ノ地跡也。没後廢之〕〔飛州志〕八。

○九月十五日、加藤直泰の亭で勿齋に会う〔錦・上〕。

○十月十九日、阿部忠秋の屋敷で鶯峰に偶然出会う〔日録・同日条〕。

○十月二十七日、国史館を訪ね、蔵書や「国史館記」、「條例」を見る。ついで六義堂の梅洞を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十月二十九日、三竹が「人麻呂碑」の鶯峰碑文を褒めたことを、鶯峰が伝え聞く〔日録・同日条〕。

●十一月一日、『本朝通鑑』起筆〔日録・同日条〕。

○十一月十一日、国史館を訪ね、草稿を見る。また、「館記」、「條例」、「八日二題詩卷」〔十一月八日の詩会の作品をまとめたもの〕を借りて帰る〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十二月八日、国史館を訪ね、松平信之と落ち合い、草稿を見る〔日録・同日条〕。

●十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十二月八日、国史館を訪ね、松平信之と落ち合い、草稿を見る〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○十一月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

三〇〕。

○四月、日光参詣の旅中、鶯峰、梅洞と詩の贈答あり〔鶯詩・

六八〕〔東・六〕〔自梅・一〇〕。

○春、石川丈山から批正を求められ詩巻を寄せられたか。丈山に

七絶「小詩数篇送似静軒戯書巻尾」〔新覆統・七〕あり〔石川

丈山年譜〕。

○六月十六日、榊原政房の別墅で、松平忠房、鶯峰、鳳岡と会う

〔日録・同日条〕。

○六月、梅洞、三竹の求めに応じて「読書得閑編序」を作る〔梅

文・五〕。

○夏、竹洞、三竹の求めに応じて「古今考序」を作る〔竹詩文・

一五〕。

○十月頃、京にあり。丈山に南直を紹介した〔竹詩文・七〕〔日録・

十月十七日条〕。

○十月二十二日、母、逝去。丈山から「柳谷子母夫人之挽詞并序」、

「題貞肅孺人画像并叙」〔新覆統・七〕を贈られる〔石川丈山年譜〕。

寛文六年 (1666) 五十二歳

○正月十九日、京都所司代牧野佐渡守親成の広間で鳳林承章に会

う〔「隔窠記」同日条〕。

○正月頃、鶯峰から、鍋島直能の肥前領内二十景十境詩を分担し

て詠むよう求められることがあったか〔日録・正月十二日条〕。

○正月頃、書簡で鶯峰に『柳谷集』の序文を求める〔日録・正

月二十日条〕。※「柳谷集序」の年記には「丙午孟夏」〔鶯文・

八四〕、「丙午孟秋」〔東海集・六〕の二通りがあるが、実際は、

寛文七年七月十九日の作であることが『国史館日録』の記述で

判る。

●九月一日、梅洞没。享年二十四歳。

○九月下旬、『北溪含毫』刊行（東六條伊東氏）。

○十一月三十日、二十六日に没した鷺峰の「七娘」の弔問に訪れる〔日録・同日条〕。

○十二月十一日、水戸相公（徳川光圀）と人見竹洞を訪ねる〔竹詩文・添長日録〕。

○十二月十五日、登營し、来年四月の日光参詣に従う旨の命令を受ける〔竹詩文・添長日録〕。

○十二月、「林勉亭子誄并序」を作る〔東・六〕。

寛文七年（1666） 五十三歳

○正月六日、勿齋の逍遙園に遊び、「丁未馬日遊勿齋逍遙園歌」を詠む〔東・六〕。

○二月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○二月、黒沢弘忠の求めに応じて「仁智楽図跋」を作る〔東・六〕。

○三月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○四月一日、鷺峰、三竹に書簡を出す〔日録・同日条〕。

○この頃、日光参詣に従う〔日録・三月二十日条・四月六日条〕。

○四月二十一日、天野半之助没。石川丈山を仲介として遺族の依頼があり、その碑銘の撰文に当たった〔「石川丈山年譜」所引、天野篤太郎氏所蔵文書〕。

○五月二十日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○六月六日、国史館を訪ね、『本朝通鑑』刊行を勧める。また、鳳岡の病を見舞う〔日録・同日条〕。

○七月十五日、金森範明を訪ね、ついで竹洞を訪ねる〔東・六〕。

○七月十九日、鷺峰、三竹の求めに応じて「柳谷集序」を作る〔日録・同日条〕。

○夏、竹洞に白团扇を贈ることがあったか。竹洞に「謝柳谷丈人惠白团扇二首」あり〔竹詩文・八〕。

○七月二十日、国史館を訪ね、鷺峰から「柳谷集序」を示される。

また、鷺峰に『本朝詩英』を示す〔日録・同日条〕。

○七月二十四日、約束した「柳谷集序」の浄書を受け取るため国史館を訪ねたが、狛庸が清書を忘れていたため受け取れなかった。また、鷺峰の「田達音考」を示されたので、その写しを求めた〔日録・同日条〕。

○八月、都築吉保の求めに応じて「小土巖詩彙叙」を作る〔東・六〕。

また、三竹の仲介により、鷺峰が「小土崑歌」〔鷺詩・七二〕を、竹洞が「小土巖跋」〔東・六〕。

○八月二十日、国史館を訪ね、『本朝詩英』の序を鷺峰に依頼する〔日録・同日条〕。

○九月一日、国史館を訪ねる。勿齋、鷺峰、鳳岡、友元、伯元、狛庸、松濤らと夕食を摂る〔日録・同日条〕。

○九月五日、鷺峰、三竹の求めに応じて「本朝詩英序」を作る〔日録・同日条〕。

○九月六日、鷺峰、「本朝詩英序」を竹洞に託す。※竹洞は、翌日、三竹に会う予定であった〔日録・同日条〕。

○九月六日、鷺峰、三竹の求めに応じて「本朝詩英序」を作る〔鷺文・八十四〕。

○九月九日頃、奥村和長の重陽の詩に和韻する。竹洞に「奥村和長英年有重陽之佳什。柳谷叟和以示余。余亦同其韻」あり〔竹詩文・八〕。

○九月二十六日、鷺峰、三竹の求めにより「童蒙一覽序」を作る〔日録・同日条〕。

○九月二十七日、勿齋宅を訪れ、竹洞と会う〔日録・九月二十八日条〕。

○九月二十八日、鷺峰、三竹の求めにより「四時幽賞図跋」を作

る〔日録・同日条〕〔四時幽賞〕刊本〕。

○九月二十八日、帰京の官暇を賜る〔日録・同日条〕。

○九月、鳳岡、三竹の求めにより「童蒙一覽序」を作る〔鳳全・八一〕。

○十二月、「再書四時幽賞後」を作る〔四時幽賞〕刊本〕。

○九月二十九日、鶯峰、三竹に書簡を書く〔日録・同日条〕。

○十月二日、鶯峰、三竹へ遣わす手紙を清書させる〔日録・同日条〕。

○十月三日、鶯峰、三竹の仲介により、水谷氏の求めに応じて「凌霞園詩」を作る〔日録・同日条〕。

○十月四日、鶯峰の許に三竹からの礼状が届く。鶯峰は凌霞園詩を竹洞に託して三竹へ届ける〔日録・同日条〕。

○十月五日、鶯峰を訪ね、帰京の暇を告げる〔日録・同日条〕。

○十月七日、竹洞を伴い、前田綱紀を訪問する〔日録・同日条〕。

○十月十日、帰京のため、江戸を出発する〔日録・十月七日条〕。

○十月、鶯峰から「送野子苞西帰書」を贈られる〔鶯文・三〇〕。

○十一月十日、丈山の書簡が鶯峰へ届く。今江清長、また帰洛した三竹から国史館のことを聞き、三竹に与えた序跋の類も見た旨を報じる〔日録・同日条〕。

○十二月十三日、三竹からの書簡が鶯峰に届く〔日録・十二月十四日条〕。

○十二月十九日、木下順庵が鶯峰を訪問し、今秋、詩仙堂を訪ねた折に、丈山が三竹に送る長牋を見たことを話題にする〔日録・同日条〕。

○十二月二十六日、鳳岡の婚儀（十一月二十八日）を賀する手紙が鶯峰に届く〔日録・同日条〕。

○十二月、竹洞に書簡を差し出す。書簡中に成良の五律「冬日詠懷」を記し、竹洞、鶯峰らへ和韻を求める〔日録・寛文八年正月十二

日条、他〕。

寛文八年（1668） 五十四歳

○正月頃、鶯峰から「春経後題二十韻」「春経跋并歌」の小冊子が届けられたか〔日録・正月十日条〕。

○正月、旧臘中に発した書簡が竹洞に届き、求めに応じて鶯峰、鳳岡、竹洞が成良の五律に和韻する〔鶯詩・七六〕〔日録・正月十二日条〕〔鳳全・一一〕〔竹詩文・三二〕。

○正月十九日、鶯峰、三竹の求めに応じて「俗語録序」を作る〔日録・同日条〕〔鶯文・八五〕。

○正月二十二日、鳳岡、三竹の求めに応じて「白雲僻居集序」を作る〔日録・同日条〕〔鳳全・八二〕。※『白雲僻居集』は「山林隠僻詩」を集めた書〔日録・同日条〕。

○正月、鶯峰から書簡「簡野子苞」〔鶯文・三〇〕を寄せられる。竹洞に宛てた三竹書簡を見たことを告げ、三竹の求めにより成良の冬日小律に和した旨を記す、また『俗語録』の序の依頼も引き受け、別紙に記した旨を告げる。

○二月二十七日頃、丈山の詩五十余を記した冊子を鳳岡・竹洞に贈る〔日録・二月二十七日条〕。

○三月二十五日、鶯峰、三竹に書簡を書く〔日録・同日条〕。

○五月六日、「病余反古録序」を求める三竹の書簡が鶯峰に届く〔日録・同日条〕。

○五月七日、鶯峰、三竹の求めに応じて「病余反古録序」を作り、併せて書簡を書く〔日録・同日条〕。※「病余反古録序」の年記、〔鶯文・八五〕は「戊申五月五日」に作る。

●五月十六日、板倉重矩、京都所司代に補せらる〔諸家譜・八一〕。国立公文書館蔵『重矩常行記』に「一、重矩在京中度々京七口御見分之序石川丈三（マヤ）之庵室野間三竹：下屋敷鷹ヶ峯な

とへ御立寄之折柄も…」とあり、重矩が所司代として巡見の折りなどに丈山や三竹のもとを訪れることがあったことを窺わせる〔石川丈山年譜〕。

○六月十三日、三竹からの「病余反古録序」を謝する書簡が鷺峰に届く〔日録・同日条〕。

○この頃、水戸家下屋敷の「四方之景」の詩の分担を鷺峰から依頼されたか〔日録・六月十三日条〕。

○七月下旬、『四時幽賞』（林和泉掾）刊。

○八月、「石州妙光寺鐘銘并序」を作る〔東・六〕。

○八月、「帝範臣軌二書跋」を作る〔『帝範臣軌』刊本〕。

○九月十一日、『四時幽賞』の版本が、『史館茗話』と共に、林和泉掾から鷺峰に届けられる〔日録・同日条〕。

○九月十二日、京から江戸に到着する〔日録・九月十三日条〕。

○九月二十日、鷺峰を訪ねる〔日録・同日条〕。

○九月二十五日、松平日向守信之の宅に、勿斎、鷺峰、鳳岡、竹洞、狛庸と集まり、明石八景の品目を相談する〔日録・同日条〕。

○十月十三日、勿斎邸で三竹と春常・友元・狛庸と会す〔日録・同日条〕。

○十月二十日、板倉石見守・石谷氏を連れて国史館を訪れる〔日録・同日条〕。

○十二月二十日、国史館を訪ね、『倭蒙求』を見る〔日録・同日条〕。

○十二月二十七日、法印に叙される〔諸家譜・八三五〕〔『嚴有院殿御実紀』三七〕。

寛文九年（1669） 五十五歳

○正月三日、国史館を訪ねる〔日録・同日条〕。

○四月、「跋明石八景詩巻後」を作る〔『扶桑名勝詩集』二〕。

○五月六日、国史館を訪ね、戸田左門氏包所蔵の盆石の記を鷺峰

に求める〔日録・同日条〕。

○五月七日、氏包の盆石を鷺峰に寄せ、あらためて名と記とを求める〔日録・同日条〕。

○五月十日、鷺峰、三竹の求めに応じ、戸田氏包の盆石を「六龜石」と名付け、その記を作る〔日録・同日条〕。

○五月十一日、鳳岡、竹洞、それぞれ「六龜石文」を作る〔日録・同日条〕〔鳳全・一〇一〕。

○六月二十日、鷺峰に香霈散を贈る〔日録・同日条〕。

○八月十五日、勿斎、松濤子、竹洞と集まり、詩を詠む。勿斎に「仲秋夜与松濤子柳谷叟竹洞共詠」〔錦・上〕あり。

○八月二十八日、竹洞の仲介により、三竹の求めに依りて鷺峰が「桑華紀年序」を作る〔日録・同日条〕〔鷺文・八十六〕。

○九月一日、竹洞の仲介により、三竹の求めに依りて鳳岡が「桑華紀年序」を作る〔日録・九月二日条〕。

○九月十日、『仮名性理』跋を作る〔『仮名性理』刊本〕。

○九月十三日、国史館を訪ねるが、鷺峰は留守で会えず〔日録・同日条〕。

○九月二十九日、帰京にあたり、別れを告げに鷺峰を訪問する〔日録・同日条〕。

○九月、鳳岡、三竹の求めに依りて「桑華紀年跋」を作る〔鳳全・九四〕〔『桑華紀年』刊本〕。

○十月、竹洞、三竹の求めに依りて「桑華紀年序」を作る〔『桑華紀年』刊本〕。

寛文十年（1670） 五十六歳

○『本朝詩英』刊（洛陽小川／林和泉掾）。

○四月九日、鷺峰、書簡を丈山・三竹に寄せ、今江清長を板倉内膳正に引き合わせた礼を述べる〔日録・同日条〕。

○六月三十日、三竹の書簡が鶯峰へ届く。書簡で加増の祝いを述べる〔日録・同日条〕。

○七月十三日、鶯峰、書簡を丈山・三竹等に寄せる〔日録・同日条〕。

○八月、板倉重矩の求めに応じ「甲冑之銘」を作る。※この甲冑は、重矩が丈山に依頼して制作したもの〔『石川丈山年譜』所引「重矩常行記」国立公文書館蔵〕。

○この頃、成良を連れて江戸へ下ったと推測される。

●九月二十八日、成良はじめて厳有院殿（家綱）に拝謁する〔諸家譜〕。

○十月二日、成良を連れて国史館を訪れる〔日録・同日条〕。

○十月、『桑華紀年』刊（林和泉掾板行）。

○十一月十九日、酒井忠清邸で、鶯峰、畠山休山、野々山肥前守と会う。薯蕷麵を食べる〔日録・同日条〕。

○十二月二十日、国史館を訪れる。勿斎も居合わせる〔日録・同日条〕。

寛文十一年（1671） 五十七歳

○五月二十四日、望海亭に松濤、鳳岡、竹洞を招く〔鳳全・八一〕。

○六月二十五日、招きに応じ、成良を伴って勿斎を訪問する。松濤子、鳳岡、沢宗堅らと同席する〔東・七〕〔鳳全・一八〕。

○八月十四日、勿斎に書簡「答勿斎」〔東・七〕を送る。

○秋、鳳岡を誘い、茶屋長意宅に遊ぶ〔鳳全・一八〕。

○九月十五日、竹洞と詩を贈答する〔東・七〕。

○十月二日、鳳岡、三竹の求めに応じて「芸窓偶談序」を作る〔鳳全・八二〕。

○十月、鶯峰、三竹の求めに応じて「本朝言行録序」を作る〔鶯文・八七〕。

○十月、成良を連れて帰京する。帰京にあたり、鶯峰から成良に「送野允迪帰京師」〔鶯詩・九二〕、鳳岡から成良に「送野允迪帰洛陽并序」が贈られる〔鳳全・一一〕。

寛文十二年（1672） 五十八歳

○三月、「清水寺十景跋」を作る〔東・七〕。

○春頃、鳳岡が成之に五絶「寄野允迪并序」を寄せる〔鳳全・三七〕。

○鶯峰、三竹の求めに応じて「野允迪書格銘 并序」を作る〔鶯文・一一〕。

○この年、丈山の卒寿に当たり、成良と共に祝いの詩文を贈る〔『石川丈山年譜』所引「新鐫石徵君六六先生祝壽編」〕。

延宝元年（1673） 五十九歳

○病を得る〔墓誌〕。

○九月頃、鶯峰、三竹の仲介により、或人の求めに応じて「富士皓雪 三五七言」を詠む〔鶯詩・九九〕。

延宝三年（1675） 六十一歳

○三月十八日、酔白子、竹洞、成良とともに勿斎を訪れる。詩の贈答あり〔東・八〕。

○春、鍋島伯棟、竹洞らと勿斎を訪れる。詩の贈答あり〔東・八〕。

○五月九日、松平信之邸で鶯峰と会う〔『南塾乘』同日条〕。

○六月、「桜岡景境詩引」を作る〔『八重一重』佐賀大学小城鍋島文庫蔵本〕。

○七月十六日、「即席」を詠む〔東・八〕。

○八月十六日頃、鶯峰へ書簡を寄せる〔『南塾乘』八月十六日条〕。

○九月十八日、酒井忠清邸で鶯峰と会う〔『南塾乘』同日条〕。

○九月二十日、鶯峰を訪ね、近日中に帰京することを告げる〔『南塾乘』同日条〕。

○十一月五日、火災により京の邸を焼く〔『南塾乘』同日条〕。

○この年、堀田正俊の領内（上野安中藩）の農夫が詠んだ和歌を得て、竹洞に示し、竹洞が堀田正俊の徳政を讃えて絶句を詠むことがあった〔竹詩文・八〕。

延宝四年（1676） 六十二歳。

八月十八日、京師において没す。享年六十二歳。葬地は成岑に同じ〔諸家譜〕。

（付記）

村上文庫本『柳谷集』の存在については、大谷雅夫先生の御教示を頂きました。記して感謝申し上げます。

なお、本稿は平成十九年度科学研究費補助金（若手研究(B)「近世前期文学における明末文化の影響」課題番号 17720038）の成果である。